

Ecocolo Magazine, No. 47, March 2010



少し遅く起きた冬の朝、ふとんにくるまっている。
ちょっとまぶしくて、でも目の前はぼんやりしていて、
頬をかすめる風は冷たいけれど、体はあたたかい。
もう夢の世界には戻れないけれど、外には出られない。
画家・クサナギシンペイさんが描くのは、そんな世界。
夢とうつつ、彼岸と此岸にまたがる「間」の世界のような……。
ここではないどこかへ行けるかは、自分次第です。

写真：江原隆司 文：上條桂子

Art for the Earth

vol. 07 title towing voyage

artwork Shinpei Kusanagi

location altman siegel gallery



目に見えないけれど
確実に在る『何か』を描く

霧、霧……。画家・ク
サナギシンベイさんが描く風
景は、雨かんむりの文字がよ
く似合う。うすらぼんやりと
広がる風景を目の前にして、
まずは呆然。そして、少しず
つ視界の解像度を上げていく
と、小さなかけらがちらほら
現れ、絵の中がだんだんとに
ぎやかになっていく。

今行われた個展のタイト
ルは『lowing voyage』。その
意味を彼に尋ねてみた。

「low」は『引く、曳航す
る』という意味。自分の過去
から引く張ってきているもの
は、いつも正面から向き合う
必要はないんだけど、目をそ
むけるわけでもなく、無視す
るわけでもなくという……。
言葉は難しいですね。言葉に
したくないと思って絵を描い
ているので」

少し困った表情を浮かべて
そう答えてくれた。確かに、
絵という表現方法で何かを発
信している人に対して、言葉
は少々扱いづらい存在なのか
もしれない。言葉というもの
は、難しい概念を端的に表現
できる代わりに、あやうい共
通認識によって意味が限定さ
れてしまうことが往々にして

ALTMAN SIEGEL

1150 25TH ST. SAN FRANCISCO, CA 94107

tel: 415.576.9300 / fax: 415.373.4471

www.altmansiegel.com



あるからだ。
今回展示された作品は11点、すべて平面作品である。
「キャンパスにはたぐさんのモチーフと、何層ものレイヤーがあります。絵と向き合った時に、その人がどこに視点を置くかでふわっと世界が開けたり、グッと内面に寄ったり。もちろん何が起きるか人は人によって違うと思うのですが、そういった絵と人の間にある「見えない何か」が起こるような仕掛けをしています。絵を通して何か自分のメッセージを発信したいかというところではなく、絵の前に立った人の中にある「気づき」を喚起するスイッチになればいいなと」
モチーフの意味をひもとくのではなく、絵を通して自分を省みる「鏡」のような存在。そこに映るのは、自分が反転した姿と背後にある世界ではなく、過去の思い出や記憶の中にある景色、普段は目で見ることができない何か。
「形がなくて目には見えないけれども、確実に今そこに在るものって、意外とこの世の中にいっぱいあって。すごくわかりやすく言うと場の空気みたいなものとか。そういうことに興味があつて。目に見えないけれど確かに在るもの



くさなぎしんべい

1973年東京生まれ。出版社勤務を経て、2005年頃より書籍の装丁などに絵を提供する傍ら、現代美術の分野でも活動。光の微妙な色合い、空気のような世界を描く。個展「ideath」(09)やグループ展など出品多数。

に形を与える、それを僕はやっていくのだと思います。人は、自分の中にあるものからしか始められないし、自分で気づかなければ何も変わらな。絵というのは、自分の内面に立ち戻るための、ひとつの装置なんじゃないか」
目に見えない「何か」に対して敏感になる、それだけで日常は輝きを増すし、人にもやさしくできるのだ。
言葉にすると表現が陳腐になつてしまう、と笑いながら話すクサナギさんが、絵やタイトル、話しぶりからすると、言葉とはとても仲がいい人なのだと感じる。
「言葉もすごく好きだし大事にしたいけれど、そこから零れてしまうものも実はたくさんある。そういうものも同じくらい大切にしていきたい」